

都市の隙間における立体公園構想

-日中の古典庭園をベースに-

Build a Three-Dimensional Park in the city

- Based on the Chinese and the Japanese Classical Gardens -

■ 喻 錚 Sou YU

愛知県立芸術大学大学院 関口研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：隙間、回遊、庭園、公園、立体化

はじめに

中国は 1978 年から開始された経済開放政策以降、経済の高度成長や不均衡発展戦略[注1]により、東部沿海地域が急速に発展している。その一方で、人口と産業の集積によって、人口過密、都市気候の悪化、緑地面積の減少、居住環境品質の低下など、一連の社会、環境問題が生じている。それにもかかわらず、「十四五計画と 2035 年発展予想」[注2]では、「現在 60%の常住人口の都市化率を 65%に引き上げる」という長期目標が掲げられている。今後5年間、中国の都市化率は、依然として急速な成長が予想される。

人口集中や経済発展によって、東部沿海地域の地価は高騰しており、高層ビル、集合住宅、オフィスなど効率のよい建築を中心に、都市空間を縦方向に開発している状況である。それには二つの大きな問題が生じる。一つ目は、街の回遊性が低下すること、二つ目は、自然離れが起こることである。しかし、都市の開発されていない土地の減少で、パブリックスペースや緑地としての開発は難しい状況になっている。

このような背景から、都市の隙間空間を利用し、市民が歩きやすい立体化公園へ活用することは、都市環境の改善や市民ニーズの満足に役に立つのではないだろうか。ただし、現在の景観の立体化配置を調べると、あくまで建築物がメインであり、その付属品としての景観をデザインするタイプの計画が多い状況である。例えば屋上庭園や垂直の森(図1)は、水平インターフェイスとしての景観を高いところに重ね移すだ



図1 左図：屋上庭園 右図：垂直の森。ステファノ・ポエリの設計による外壁部に全体に木や植物が植える高層建築。

けで、景観の間に繋がりが見えない。また、ただ風景を作るだけで、景観と人の繋がりが薄いデザインも多く見られる。一方、大阪なんばパークス(図2)のように空間のシーケンスを持つ屋上公園などもある。



図2 大阪なんばパークス

景観の立体配置の現状としては、西洋建築思想の影響を受けたデザイン手法として、東洋型の庭園空間のアイデンティティの継承が少ないといえるだろう。けれども、東洋庭園に含まれる長い歴史において風景に対する美意識が現代の東洋人を支えており、その表象と内面は現代の東洋の景観デザインの在り方を導いている。例えば、龍安寺の石庭のような座観式庭園[注3]の内観性は、現代人が心の平和を求めるニーズを満たすことができる。また、桂離宮や蘇州庭園(図3)のような回遊式庭園[注4]は、緑化を満足できる一方、回遊式の特徴は現代人が求める散策、休憩、コミュニケーションなどのニーズを満足させられる。さらに、都市の隙間が多様化していることも、庭園空間の可能性を広げている。

このような状況から、本研究では、都市の中に点在する隙間空間を活用し、東洋型の庭園空間の可能性を考えていく。



図3 蘇州庭園 拙政園(せつせいえん)

1. 都市の隙間について

1.1. 「間」の思想

日本においては、時間も空間もともに「間」というひとつの言葉によってとらえられてきた。19世紀明治維新以降、日本が西洋の「time」と「space」の概念を説明するために、time=chronos+間、space=void+間、「時間」と「空間」という単語を作ったとされる。長い歴史の中で、日本の空間と時間は、未分化のまま認識されていて、「間」というひとつの言葉によってとらえられてきた[注5]。

広辞苑によると、「間」では、主には次の4種の意味に訳している。“物と物、または事と事のあいだ”、“屏風・ふすまなどによって仕切られたところ”、“日本の音楽や踊りで、所期様子”。「間」は時空感、見方、気配、場、余白、距離、美意識などであり、世俗的レベルから神話的レベルまで、日本人の感覚と思考の中核と考えられる。

「間」を考える前提は、「気」である。日本人は、人でも物でも、人自体や物自体だけではなく、「その周辺の空気をふくんで人であり物だ」と理解している[注6]。人の「気」や物の「気」が共振すると、そこに「間」が生まれる(図4)。例えば日本の家屋は、西洋のように「キッチン」、「リビング」と呼ばず、「茶の間」、「居間」と名づける。「気」から「間」の変化は、建築だけでなく、人と人、家と家の気配などにも見られる。「間合い」をとりながら、自然に集落になっていく。西洋のように、街をいくつかの地域を分割し、建築とオープンスペースを「図と地」の関係に思考して都市空間を組み立てる手法は全く違う。

中国の易経には、「一陰一陽、これを道」とあり、中国最初の思考様式がある。道は混沌であり、陰陽は物事についての相対的な見方である。対立する両面の相互維持、相互転換が世界の基本法則と考えられる。一方、「間」の思想は陰でもなく陽でもなく、それ自体は感覚と思考の原点と見られる。「間」は見えない空白であり、その中にあらゆる関係性を内包するのである。

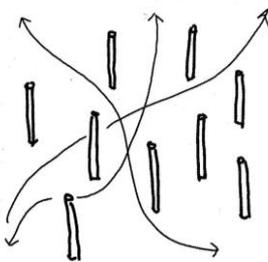


図4 柱の「気」とそれが共振された「間」

1.2. 隙間

隙間には、上述の「間」の特性が含まれる。青木淳は、「隙間というのは、つくろうとしてできているわけではなく、あるものとあるものをつかった結果、生まれるもの」と説明している[注7]。こうした隙間空間の成り立ちの非意図性に基づき、既存空間の隙間を「副産物としての隙間」、予め構想した隙間を「意図的な隙間」という2種類に分類する。

また、隙間空間のスケールにより、隙間空間の種類を「建築の隙間」、「都市の隙間」の2種類に分類する。「建築の隙間」とは、一つの建築でも成立でき、建築のかたちや周辺の環境に大きな影響を受ける隙間である。「都市の隙間」とは、複数の建築や街路の間に、より全体的なシステムを持つ隙間空間と考える。

本研究では、このうち主に「都市の隙間」で立体公園の可能性を追求する。隙間に何をデザインするかは、その場に立ち現れる気配と人の関わり方をデザインすると考えられる。そして公園を通じて、個々の隙間に「間」の特性をより豊かにする。

2. 都市における立体公園

2.1. 公園の源流と概念

公園(park)という単語は、17世紀のブルジョア革命の勝利後に現れた。1688年にイギリスのブルジョア革命が勝利した後、ブルジョア階級は王室の財産を没収し、もと王室の狩猟園、庭園が定期的に市民に開放され、すなわち「公園」という名称になった。その後、欧米の都市化の加速による環境・社会問題で、近代的な公園が19世紀中盤に現れ、19世紀後半には大規模な都市公園の建設が巻き起こった。現在の公園は、人々が憩いまたは遊びを楽しむために公開された場所(区域)と一般的に認識される。

2.2. 東洋型の庭園空間アイデンティティの活用

歴史を振り返ると、東洋でも西洋でも、近代以前の庭園は基本的に王室や個人の私有財産として、王室の権威や個人享楽のために作られた。定期的に市民に開放される私園や王室庭園があるが、庭園が作られた動機から見ると、そのまま「公園」と呼ぶのは適当でない。その私有の属性があるから、庭園は庭主の处世哲学、世界観、自然観を内包できる。例えば、中国南方庭園に内包する「天人合一」の自然観、「隠棲」思想などがある。しかし近代以降、社会階級の変化や西洋現代的な方法論の影響で、伝統的な庭園が生き延びる社会環境園を作る目的は、庭主の個人的な思想の表現より、大衆ニーズを満足することになる。

一方、1978年の改革開放経済政策以降、中国は都市化の高度開発により、建築や景観が次第に建設される中で、地域の風土、文脈を考えず、西洋的方法論を一方向的に真似したデザインが多く存在している。ポストモダン主義建築の波が押し寄せる中国は、西洋的でなく、独自のアイデンティティに基づく環境デザイン方法論の探求が始める。環境デザイン分野においては、古典庭園を現代化する可能性が求められる。

では、庭園の本質は何だろうか。中国近代の造園理論の開拓者童寓(ドウシュン)は、「植栽がなくでも、庭園になる」と述べた[注8]。中国の古典庭園には、表層のシンボルと深層的な空間特性が含まれる。表層のシンボルは、各時代の文化の影響を受け、庭園の見た目として、築山、池、楼閣、亭、窓、植栽などの形式的な記号や、石、松、梅など材質の特徴として表れる。しかし、時代の変化によって、それら表層のシンボルは現代景観デザインの発展に適応できなくなる。ゆえに、庭園の核心となる独自の空間の仕組みに関する研究が、庭園アイデンティティを受け継ぐ際に最も重視されている。その結果は古典庭園のアイデンティティを現代に活用する鍵となる。

2.3. 立体化のニーズ

既に述べたように、中国は都市化高度開発により、東部沿海地域は人口過密、都市気候の悪化、緑地面積の減少、居住環境品質の低下など一連の社会、環境問題が生じている。一方、都市未開発土地の減少で、未開発土地はパブリックスペースや緑地としての開発は難しい状況になる。都市公園は都市環境の調和と市民の公共ニーズを満たせる機能を担っている。このような背景から高密度の地域で、小規模、高緑化率のように立体化公園デザインが求められている。

3. 古典庭園について

3.1. 世界の見え方としての庭園

既に述べたように、庭園の核心となる独自の空間の仕組みに関する研究が、庭園アイデンティティを受け継ぐ際に最も重視されている。しかし、西洋建築的な視点で庭園空間を分析すると、客観化された空間システムが発見できるが、文化の中核を見落としやすく、実践中でも手法に陥りやすい。ゆえに、空間を探究する前に、古典庭園の本質と精神を理解する必要がある。

庭園思考の基礎は自然を再構築することである。中国には古来専門の造園家がおらず、庭園は文人や画家が主導して設計された。これらの人たちは士大夫(したいふ)階級として、道教思想の影響を受け、自然に憧れ、山水風景に夢中になっていた。一方、時代によって個人の才能が重視されず、世間離れして山水に返還する行為が「隠棲」と言われ、後世の造園活動に大きな影響を与えた。南北朝時代の隠者が始めに自然の中で暮らすことから、唐朝の都市山林の「中隠」思想まで、自然庭園から写意庭園への変化を始め、現代の蘇州庭園の原型が現れた。庭園と水墨画、詩歌とともに、文人「山水情趣」の容器として、文人の生活態度と思考方法を表してきた。

北宋の山水画家郭熙(カクキ)は画論『林泉高致』において、山水に対して以下の四つの理想を提唱した。それらは、“行ってみたくなる”、“眺望をめめてみたくなる”、“清遊してみたくなる(世俗を離れて風流な遊びをすること)”、“居住してみたくなる”山水を指している。さらに、清遊と居住できることは、行と望より、一番大切だと考えられる。それ以降、山水画はどんどん空間仕組みのゲームと叙事的なデザインになっていった。当時の山水画は、自然の風景を描くことより、心にある庭園の描写に近づいている。画論などの影響を受けて、北宋から清末までの造園に現れた自然観は、自然の山水から清遊と居住などのイメージを抽出し、それを圧縮、再構築することによって都市居住のモデルになったとされている。

日本の庭園では禅宗と神道の影響を受け、中国の庭園と異なり、静観と悟りがより重視される。日本の庭園は、直に水が使われる池泉庭園も、白砂を敷き詰める枯山水も、いずれも海のメタファーとして使用される。しかも、石は神や神の依代に見立てられる。蓬莱、亀島、鶴島が庭に並べられた配置は、神の位置を確認することである。ゆえに枯山水に入ることにはできず、それと距離を維持しなければならない。

ゆえに、空間の見え方の違いと言えば、中国の庭は身体の回遊であり、日本の庭は目の回遊である。書院造、寝殿造システムで縁側を一周回ると、絵巻を広げるように風景の連続

的な画面が得られる。一方、蘇州庭園の空間は、時空と視点を統一されず、庭園空間は、大小、明暗、高低、遠近などの空間対比を用いて空間を連続し、断片化された「山水」を集合しているといえる(図5)。



図5 沈周「雪山図」

3.2. 見え方とデザイン

日常生活において自然の風景に目を向けると、最初は何を見られるかによって決められる。そしては何を見たいかによって決められる。3.1で述べたように、蘇州庭園は断片化された「山水」が集合されたシステムであり、そのシステムの核心は、モジュール化と思われる(図6)。中国文化の原点である漢字から見ると、漢字は種類が多いが、基本モジュールは64種の筆画であるとされている。しかし、それによって漢字は表意文字でありながら表音文字でもあり、象形文字でありながら表語文字でもある。漢字に基づいて、中国古来の文化は、無意識的に漢字のようなシステムが遵守されている。山水画のような、限られたモジュール(山、石、樹木など)でも、無限な情趣変化が引き起こされることが可能である。庭園と対照的に見ると、最初のモジュールは亭、台、楼、閣などであり、固定されている「山水情趣」の最小限のモジュールである。蘇州庭園は、レゴのようなユニットによって構築された世界観だともいえるだろう。

上述のように、現代社会においてどのように現代人のニーズを捉え、それらの原点から反映させる「山水情趣」があるモジュールを再構築することは、庭園のエッセンスを受け継ぎ都市公園へと向う第一歩と考えられる。

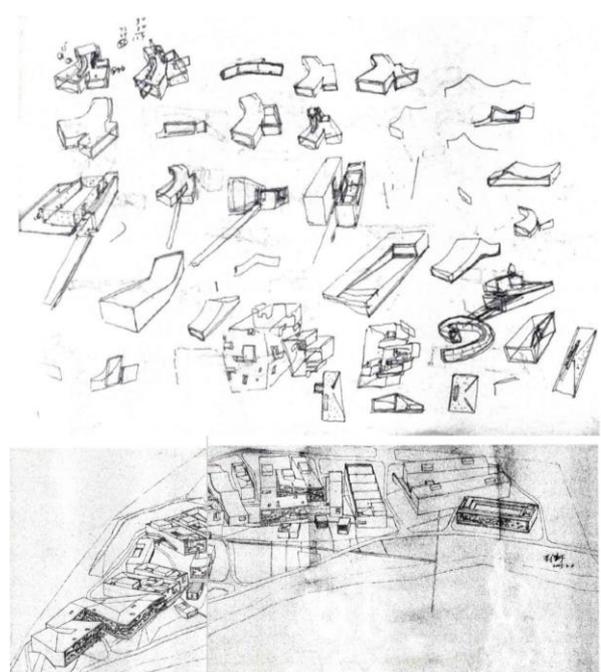


図6 王澐による中国美术学院象山校区のデザイン、庭園空間の特徴をモジュール化することが見られる。

注、引用

- 1) 中国の東部沿海地域を経済発展の優先地域とし、東部から西部の順位に経済を発展させる戦略。
- 2) 正式名称は、「中華人民共和国国民経済・社会発展第14次5ヵ年(2021~2025年)計画と2035年までの長期目標」である。
- 3) 室町時代頃に興った、書院や座敷から座視觀賞するための比較的狭い庭園。
- 4) 園内を歩きながら回遊して鑑賞する庭園。
- 5) 磯崎新、『見立ての手法』、鹿島出版会、1990年、6頁
- 6) 黒川雅之、『八つの日本の美意識』、講談社、63頁
- 7) 青木淳、「最近の仕事」、
<https://www.tozaias.or.jp/mytech/01/01_aoki05.html>(2001 アクセス)
- 8) 『江南園林志』により。

他参考文献

- ・ 磯崎新、『見立ての手法』、鹿島出版会、1990年
- ・ 黒川雅之、『八つの日本の美意識』、講談社、2006年
- ・ 剣持武彦、『「間」の日本文化』、講談社、1978年
- ・ 赵晶、朱霞清、「城市公园系统与城市空间发展—19世纪中叶欧美城市公园系统发展简述」、中国园林、2014
- ・ 赵纪军、「也谈“园林”及其现代化」、中国园林、2014
- ・ 冯媛、孙文静、刘路祥、田朝阳、「中国传统园林现代意义的再认识—就「中国古典园林的现代意义」一文若干观点与朱建宁教授商榷」、新建築、2017
- ・ 苏芳、「中国传统园林空间的现代“芯”—基于现代园林设计六项原则的中西方传统园林比较研究」、华中建築、2016
- ・ 金秋野、王欣『乌有园 第一辑』、同济大学出版社、2014年
- ・